

萃

大阪発達総合療育センター機関紙
第20号

社会福祉法人 愛徳福祉会

大阪発達総合療育センター

Osaka Developmental Rehabilitation Center



保険医療機関 南大阪小児リハビリテーション病院

特集:ポパーズ講習会 ・ 新規事業「うきうき」

■ 年頭挨拶

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長 梶浦 一郎



新年明けましておめでとうございます。年初めに一言ご挨拶申し上げます。毎年の事ですがお正月というのはやはり楽しいもので、特に晴天ですと明るさも際立ちます。私事ですが、小学生の頃は大人も子供も普段と違う正装をして近所周りをしたり、氏神さんへお参りに行ったりと本当に楽しい雰囲気だったことを覚えています。中学の頃は戦争が激しくなり、空襲のため通学路が焼野原になってしまいましたが、不思議に心は沈んでいませんでした。それは私が鈍感であったということよりも、子供心に誇りを持っていたからです。皆さんは今年のお正月は如何だったでしょうか。

さて、去年の事を振り返りますと政治、外交などは大変な一年でした。立場上お話しするのを控えた方が良いのかも知れませんが、しかしながら日本全体の社会の風潮を見過ごすわけにはいかない大変な事がありました。それは「ごまかし」「偽装」「捏造」が頻発したことです。私たちはマスコミを通してしか知ることが出来ません。ですがこのような事が起こるたびに責任者がテレビで頭を下げ謝罪しているのを見ると、本当だったのだろうと思わざるを得ません。そして深刻な問題と思うのが「偽装」「捏造」に係っているのが超一流と言われる研究所、企業などに勤めている人たちであった、ということです。凶悪な事件の頻発も含めて日本国内でのモラルの低下があるのではないのでしょうか。自分の国に誇りを持たなくなるとこんな事になるのかと暗澹たる気持ちになります。ですが一方では「ごまかし」が出来ないスポーツの分野での多くの快挙や2人同時のノーベル賞受賞など多くの明るいニュースもありました。宇宙開発では10回以上のロケット発射の成功や、MRJという国産のジェット飛行機第一号の成功など多くの本当に喜ばしいニュースもありました。このような明暗はなぜ起こってしまうのでしょうか。無責任な評論家は「格差の拡大」というが、どうしたら良いかという方策は誰も言いません。「政策が悪い」「社会が悪い」というだけです。

ある人の話ですが、「今の日本では精神的な安定や余裕を失い少しでも失態したものを吊し上げ、罵倒することが正義とし、相手の気持ちを忖度する仁や義を重んじる精神基盤が崩れている」(京都大学 佐伯先生)とおっしゃられていました。手抜き、捏造は決して許される事ではありませんが、都合の悪い事や利益の出ない事は「ごまかそう」という風潮を助長しているようです。

また今後心配なのは天災ではなく、何か大きな人災が起こるのではないかという事です。昨年センター内の重大な出来事といえば入院児の「ノロウイルス感染」です。幸いにも迅速かつ適切な職員の対応によりそれ以上の大事には至りませんでした。ほぼ同時期に公立の小児病院で入院児が一人亡くなり感染者が7人と新聞に大きく掲載されていました。今後もいつ何時大きな事件が起こるかも知れません。職員の間にも一層の緊張感をもって仕事にあたってください。

最後に年末の行われた院内学会を聞かせて頂きました。皆さんの熱意を大いに感じ敬服致しました。それにさらなる期待しております。センターとしても今後は新しい事業を始めていきたいと考えています。常に前に進んでいきましょう。障がい児医療の進歩のため試行錯誤をすることにより、皆様に負担をかけるでしょうが、センターの誇りが皆様の誇りになり、それがひいては国の誇り、そして社会の安定になることと確信しております。

皆様の尚一層の御健闘をお願いいたします。

皆様の尚一層の御健闘をお願いいたします。

■特集によせて

社会福祉法人 愛徳福祉会 理事長 梶浦 一郎

2015年9月から11月当センターにおいて、近代ボバース概念小児領域8週間基礎講習会が開催されました。ボバース講習会は1976年日本人の指導者(梶浦、鈴木、紀伊)により、旧聖母整肢園で正式な講習会として始まりました。

そして一時期他施設に移って行われていた講習会ですが、2015年に再び当センターで開催することになり、私にとっては里帰りをしにきたような気持ちになりました。本来あるべき所に戻ってきたことは大変嬉しく、誇るべき事です。今後もこれを永続していくつもりです。

2015年度近代ボバース概念 小児領域8週間講習会を終えて

リハビリテーション部顧問
アジア小児ボバース講習会講師会議(ABPIA)シニアインストラクター
理学療法士

紀伊 克昌



講習会の歴史

1973年9月厚生省の招聘でボバース夫妻が来日し、日本国初のボバース8週間講習会が開催された。全国50か所の肢体不自由児施設から代表したPT、OT 50名が受講された。8週間講習会のうち 初めの2週間のみボバース夫妻が講義、デモ、実技を指導され帰国された。残り6週間は、東日本グループ25名と西日本グループ25名に分けて同じことを2回指導するようにと、ボバース夫妻と厚生省から梶浦先生と紀伊に委託された。西日本グループの会場は、聖母整肢園(現、大阪発達総合療育センター)であった。1970年と1973年の2回ロンドンボバースセンターでトレーニングを受けて国際インストラクターに認定されていた紀伊と、1972年に受講されていた梶浦先生の両名に、日本における以後のボバース講習会開催の全権を委任され、加えてロンドンと同じ質の水準の遵守を約束させられた。その3年後、1976年1月、厚生省および全国肢体不自由児連絡協議会の要望を受けて、梶浦先生と紀伊の日本人指導者による小児ボバース概念8週間基礎講習会を聖母整肢園で開始した。全国から多数の受講希望が寄せられ、受講待機者名簿が400名以上になった。主要講師に1975年ロンドンボバースセンター受講して帰国された鈴木恒彦先生(当時は宮城県拓桃整肢園所属)が加わられた。1982年に梶浦先生、紀伊が中心メンバーになって、ボバース記念病院が開設されてからも、引き続き小児8週間基礎講習会を毎年開催してきた。週に1~2回程度であったが、南大阪療育園(現、大阪発達総合療育センター)での講義、治療実習なども行って、両施設での共同指導体制を継続した。

脱NDT(神経発達学的治療)から CBC(近代ボバース概念)へ

米国で呼称されていたNDTを我々もボバースと同義語として使用していたが、次第に違いが明らかになり、あくま

でもボバース夫妻およびロンドンボバースセンター指導陣をモデルにするべきと軌道修正した。米国が皆保険でなく自由診療文化であり、NDTは高価格のブランドとして脳性まひ児と家族たちに利用されていた。大量生産されたNDTセラピストは、多数の出版物を手引きにして、画一化されたボバース体操を提供している。この状況は外部からたびたび批判され、ついには脳性まひ児治療にはNDT/ボバースは使用禁止という論文も出た。我々は、一人ひとりの特性と障がいを深く掘り下げるために、最新の神経科学を引用し、討議を重ねて最善策を見つけ出すという医師カレル・ボバースとPTベルタ・ボバースの協働作業スタイルを踏襲してきた。脳性まひの問題が、難しいからといって米国NDTの様に、個別ごとの問題解決を放棄したり、安易な普及スタイルの治療法に変更したりする試みは行わなかった。しかし、1973年からちょうど40年の歴史を重ねてきた講習会であるが、これまでの受講生のアンケートでは、指導者間の食い違いが欲求不満的に述べられていた。そこで、思い切って2014年1月の森之宮講習会から大変換を図った。30数年ぶりに紀伊がコースリーダーを務め、初日から8週目最終日まですべてに責任を果たすと同時に、次世代のコースリーダー(西野PT、日浦PT)に「近代ボバース概念」指導法を伝授することも意図した。内容は、感覚系の発生・発育・発達/求心系操作による個別性評価/多重感覚環境における姿勢フィードバック機構の発達/エラーチェックシステムによる身体図式形成過程/ボトムアップ機構とトップダウン機構による直立姿勢の発達過程/骨格筋の発生・発育・発達/質的ADLのための課題分析/先行性姿勢調整による課題遂行/即時効果を基盤とした学習目標設定/などを、講義、デモンストレーションと臨床推論討議、実技練習、治療実習によって受講参加者の臨床実践能力を高めるようにした。座学でなく体験学習による知識理解、討論による納得、つまり欧米式参加型教育スタイルを貫いた。



1週目は受講生に戸惑いが見られたが、週が進むにつれ受講生達は「自分達の講習会」という気迫が高まってきて、積極的に意見を述べ、身体を動かすようになって最終8週目では各々の職場に帰ってから実践できる自信を見ることができた。

受講生感想

飯島 禎貴 (大阪発達総合療育センター 小児科医)

「苦」を「楽」にする技を学ばせて頂きました。本人の持っている能力の引き出しだけでなく、子どもたちの持っている力の見つけ出し方も学びました。子どもたちの立場に立って、やる気を引き出すために遊びの中で本人の力を引き出すリハビリは、やる側も楽しんでやれました。その分、子どもたちに合わせたりリハビリを見つけるために必要な勉強や努力に驚きましたが、負けずに学び続けていきます。

小谷 栄恵 (公立豊岡病院 PT)

今回、講習会に参加させていただき、初日から職員の方お一人お一人から法人を挙げての「おもてなしの心」がとても伝わり、なんて温かいのでしょうか!!とても感動しました。8週間、1日1日の講義、実習では、たくさんの先生方や患者様にご協力いただき、とても貴重な日々を過ごすことができました。幅広い講義内容がとても魅力的で、また、講義内容を振り替えることができる実習となっており、頭の理解、整理が付きやすい流れで、気が付けば講義内容が分かるようになっていた状態でした。綿密に組まれたカリキュラムで、とてもびっくりでした。小児リハのベースが作れたように思います。

泉谷 憲正 (四天王寺和らぎ苑 OT)

歓迎会や昼食等、配慮して頂きありがとうございます。職員の方々がとても親切にやさしく接して頂きありがとうございます。受講する環境はとてもよかったです。ファシリテーションを通して自分の身体に気づくことができ、感じる手ができた手に思いました。自分の分析力、観察力の無さ等の問題点に気付くことができました。今まで知らなかった知識、技術を得ることができ、とても勉強になりました。講習会に参加させていただき、本当に良かったです。

津久井 美枝 (PT)

8週間本当にありがとうございました。インストラクターの先生や講師の先生方をはじめ、栄養科、事務の方、患者様やそのご家族、病棟職員の方と、本当にセンター全体で運営、支援して下さい、恵まれた環境で学ぶことに集中させて頂けたと感じています。とても感謝しています。職種を問わず笑顔で気持ち良くあいさつして下さいるので、明るい気持ちで1日を始められました。センターとして当たり前に行われていることのレベルの高さに感銘を受けました。それが患者様との信頼関係につながり、治療実習にケースとして参加して頂いたのだろうと感じました。ありがとうございました。

平田 千恵子 (寺沢病院 OT)

知識の整理とともに、子どもさんたちが、なぜ、どのように表現しているか推論し、多様な視点を持って、セラピーを通して1つ1つ解決していく過程の中で、新しい気づきを得ることができました。また、自分自身の身体や受講生の身体も1人1人個性があり、感覚の受け取り方にも違いがあることを学ぶことができました。先生方のご指導のもと、チームで子どもさんの潜在能力を確認でき、今後も継続して知識、技術、経験の面から向上心をもって取り組んでいきたいと思えます。ありがとうございました。





発達障がい療育事業「うきうき」



■特集によせて



大阪発達総合療育センター副センター長
南大阪小児リハビリテーション病院院長

船戸 正久

2015年度から前大阪大学保健学科教授永井利三郎先生が当センターを手伝っていただけることになりました。永井先生は、長年行政と協力して大阪全体の発達障がいの子ども達の支援ネット形成に中心的に努力されてこられました。また2015年5月28～30日に開催された第57回日本小児神経学会学術集会の会長の重責も担いました。一方大阪市では発達障がいの方々の支援を拡げる目的に業務委託する専門療育機関を公募しており、当センターで業務委託を受けることになりました。待機しておられる就学前児40名限定に港区分園のあさしお園で9月から開始しました。新規事業名を「うきうき」と名付け、医師・看護師・保育士・臨床心理士など多職種協働で支援をしています。当センターにとっても新規事業となりますが、最初心配したよりも、ご本人・ご家族に喜んでいただけているようです。今回は特集の一つとしてその様子を紹介させていただきます。

プール学院大学 教授

永井利三郎



保育士

吉中 三佳



発達障がい児専門療育事業「うきうき」の立ち上げを目的に、平成27年9月から「あさしお園」に来させていただいています。私自身は、3月まで大阪大学の保健学科で、看護師、保健師、養護教諭を目指す学生の教育に従事していました。現在は堺市にあるプール学院大学短期大学部の教育に従事していますが、平成28年4月から教育学部に新しく養護教諭の養成課程がスタートしますので、その教育を担当するための準備をしています。発達障がいのある子どもたちは、まじめでやさしい子どもたちばかりですが、指示がうまく理解できず、うまく結果を出すことができないために自信がなかったり、先が読めない不安のために不適切な行動をとってしまったりすることにつながっています。「うきうき」では、このような子ども達がうまく指示を理解して、集中して物事に取り組む練習をします。あさしお園は、身体障がいのある子どもたちの療育に取り組んでおられることと思いますが、このような子ども達の中にも発達障がいの特性のある子がたくさんいると思われます。これらの子どもたちに対しても、「うきうき」の取り組みをぜひ活用していただきたいと思っています。そのための情報交換をしていきたいと思っています。よろしくをお願いします。



大阪市から委託を受け、9月に発達障がい児専門療育「うきうき」がスタートしました。主に自閉症スペクトラムと診断を受けたお子様に対して個別療育を行います。療育の目標として①自閉症スペクトラムの理解を深め個々に合った支援方法のモデルを提示②療育で身に付けたことを日常生活の場へ広げていく③保護者の方にもより理解を深め特性に合った支援をして頂くことを目指しています。療育の時間は2週間に1回、1時間、年間20回を保護者同伴のもと行います。内容は、①意思の伝達、②行動調整、③自立課題、④身辺自立、を主としてTEACCHプログラムを活用し、お子様の好きな遊びの中でそれぞれが身に付くようにします。

療育が始まると、子どもたちの中には場所、人見知りをして保護者の方にくっついて一言も話せない子、初めての場所に興奮し部屋中の探索活動をしている子と様々でした。2回、3回と療育を重ね、絵カードなどを使って目で見てわかりやすいように環境を整えることで、今自分が何をしているのか、次に何をするのかを理解し、落ち着いて課題に取り組んでいけるようになってきました。この「うきうき」には、保育士、心理士、児童指導員、看護師、小児科医が携わっています。それぞれの専門性を生かし、様々な視点から個々のニーズに応じた療育を提供し、親子共々自信を持って社会の中で過ごしやすいように道しるべになっていければと思います。皆様のご指導、ご協力のほどよろしくお願いします。

最優秀賞を受賞しました

—第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会報告—

リハビリテーション部 理学療法科副主任 出口 奈和



去る2015年5月30-31日大阪府高槻市で、全国の訪問リハビリテーションに携わる専門職が集う本学会が開催されました。

当センターからは、訪問看護ステーションめぐみ絹川所長、牛尾主任が企画シンポジウムのパネリストを務め、米持主任と私は一般演題での発表をしました。そこで私が報告しました「アドバンスケアプランを取り入れた重症児の在宅移行支援」が最優秀賞に選出されました。当センターが現在取り組んでいる重い障がいのある子どもの在宅移行支援の経過と、訪問看護ステーションめぐみによるその後の取り組みをまとめたものです。

船戸正久副センター長は、子どもと家族中心のより豊かな生活を支える医療の発展を願い、「ご家族としっかり話し合い、

医療チームと家族が情報を共有し、両者が最適な医療選択と意思決定を行うこと」の重要性を日常業務のなかで私たちに示されています。今回の報告では、アドバンスケアプランの取り組みが、在宅移行後の多職種連携においても、ご家族との方向性がずれないための指針となる可能性をお伝えしました。小児医療においては先駆的な取り組みであり、今後の在宅支援の重要なテーマとして評価されたと受け止めております。

訪問セラピは、当法人の訪問診療医和田浩医師、めぐみの絹川所長をはじめとする看護師と常に情報を共有、相談できる恵まれた環境下で実施しています。今回の受賞を機に、家族に寄り添いつつ、医療者として迅速な判断と対応が要求されていることの自覚を新たに、今後も精進してまいりたいと思います。

感謝と思い

前大阪発達総合療育センター事務部長

徳永 一三



私は3年3ヶ月の間、大阪発達総合療育センター事務部長として働かせていただきました。

振り返りますと、あっという間の3年余でしたが、当センターは「夜と霧」を書いた精神科医師・心理学者のV・E・フランクルが言いました、「生きる意味と価値を見いだせる職場」がまさに当てはまる職場ではないかと思います。そのような職場で共に働かせていただけたことを感謝し、誇りに思っています。在職中、様々なイベントがありました。中でも「厚生労働大臣保健文化賞」（第一生命主催）の受賞が特に印象に残っています。また厚生労働省の「重症心身障害児者の地域生活モデル事業」受託を初め、国や地方自治体から様々な事業を受託しました。私も、それらの業務の幾つかに参画する事が出来、センターと一緒に成長する事が出来たと実感しています。また晴天の霹靂であった馬場清先生のご急逝、入居者や職員のご葬儀等、忘れることのできない出来事も経験しました。しかし、梶浦一郎理事長をはじめ経営会議の皆様のご理解、理事・監事・評議員の皆様のご支援、医師の先生方や全部署の職員の協力、事務部職員のバックアップ、また関係行政機関担当の皆様のご懇切な指導を受けつつ、業務を続けることができましたこと、紙面を借りて深く感謝申し上げます。また、後任の山口備事務部長は幸いにも私の前任者でもあり、私よりずっとセンターの業務に通じた方ですので、安心して業務の引き継ぎができ、有難く思っています。

センターは今後、益々地域に密着した働きが求められていくと思いますが、現在も続けられている全職員の協働作業によって、法人理念が益々実現され、発展されることを心からお祈りします。

ご挨拶

大阪発達総合療育センター事務部長

山口 備



昨年9月半ばより、徳永一三前事務部長の後任を拝命致しました山口備(そなえ)と申します。徳永さんの前任者でもありましたので、3年数ヶ月ぶりの再登板になりました。

この間の当センターの変化、特に障がい児者の在宅支援機能強化の急速な進展は私の想像以上でした。当時からショートステイの積極的な受入が行われ、訪問看護・訪問リハは立ち上っていましたが、訪問診療の開始、ヘルパーステーション「めぐみ」と児童発達支援事業「あおば」の開設、在宅移行支援プログラム導入とNICU後方支援システム構築に向けた関係機関等と協働しての継続的活動等々、正に法人の基本理念に沿って、障がいのある人々が地域において安心して生活できるように総合的支援を実施するため、積極的な取組が不断に続けられていました。さらに、これらの新事業並びに医療と福祉の向上に向けた人材獲得・育成と組織改正が断続的に実施され、当センターは目覚ましく変貌して来ております。

社会福祉法人制度改革を柱とする法案が国会で審議され、その対応が求められる中で、新事業の強化・育成を始めとして、課題が山積しておりますが、設立以来、諸先輩方や現職の役職員の皆様が進取的な取組を続けて来られた当センターで、その業務の一端に再び加えていただけたことを光栄に思い、誠に微力ながら全力で任務に傾注して参りたいと思います。ご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

職員研修実施状況 H27年10月～H27年12月

当センターでは、質の高いチーム医療の提供をめざして、様々な職員研修を行い、技術の向上と知識の蓄積を図っております。

実施日時	企画部署	研修名	講師	参加人数	場所
平成27年10月14日(水) 17:40～18:40	教育研修部	障がい児者施設における虐待	児童虐待防止協会 理事 藤本勝彦先生	120名	5階ホール
平成27年10月20日(火) 17:40～18:40	褥瘡管理委員会	褥瘡ケアの基本	甲南女子大学 講師 松田常美先生	51名	5階ホール
平成27年10月30日(金) 18:00～19:00	リハ部・看護部	リハ部・看護部合同勉強会 安心・安全な更衣介助方法について	めぐみ	44名	PT室
平成27年11月25日(水) 17:40～18:40	感染管理委員会 医療安全管理会議	重心施設における冬季の感染症対策 ～ノロ・インフルエンザ対策を確認しよう～	枚方発達総合医療センター 感染管理認定看護師 藤原由美氏	122名	5階ホール
平成27年11月27日(金) 18:00～19:00	リハ部・看護部	リハ部・看護部合同勉強会 骨折のリスクから介助を考える～フェニックスの現場からの提案～	3階フェニックス	50名	PT室
平成27年12月11日(金) 17:40～19:00	教育研修部	東大寺福祉事業団のこれから	東大寺上院院長・東大寺福祉事業団 理事長 狭川普文氏	88名	5階ホール
平成27年12月28日(月) 14:00～17:00	教育研修部	発表 1)「音楽療法を取り入れた活動」 2)「あさしお園の課題別グループ活動での取り組み」 3)「プロ意識をもって! 義肢装具室の開設!」 4)「軽度の肢体不自由児を対象とした学童期の親子グループについて」 5)「個別性に応じた排泄ケアの取り組み～オムツを使用される方の立場になって～」 6)「わかば病棟における集中リハビリテーションと24時間マネジメントの成果と課題」 医療安全研修会 「平成27年インシデント報告」 講演 「障がいを持った子どもたちと小児外科」 ～4年間を振り返って～	療育部・看護部/福田裕二・田中弥生・菅直樹・谷間多江子 あさしお診療所/宮本悠佑・河中誉真・曲洋子 義肢装具室/尾崎和仁・松居篤史・上野剛士 医療技術部臨床心理科/今西美那子・阿部瑠子 療育部/川副聖治 リハビリテーション部/浅野香詠・岸本晴和 佐々木良俊臨床工学科長 塩川智司医務部小児外科部長	224名	5階ホール

イベントピックアップ

ザ・リッツカールトン大阪 来院



12月8日に毎年恒例となったザ・リッツカールトン大阪様のクリスマス来院が行われました。サンタさんやキャラクターのリオン君と記念写真をパシャッ!皆さん笑顔で美味しいケーキと楽しい時間を満喫しました。

ゆうなぎ園 クリスマス会

12月17日にクリスマス会をしました。毎年恒例になっている保護者の出し物、USJから来たサンタコース、そして職員の出劇と演奏会に子ども達も大喜びでした。大成功でホッとしました。日頃頑張っている子ども達に少しはご褒美をあげることができてよかったです。



感謝

大阪発達総合療育センターへの御理解・御協力誠にありがとうございます

一般寄付金

月	寄付者(敬称略)	物品名
10月分	匿名(なでしこ活動へ) 井上 明生 10月分楽基金 10件	本園
11月分	フェニックス家族の会(クリスマス会へ) 小島 常男(株コジマ)	
12月分	匿名 匿名(利用者様訓練補助具開発として) 東住吉区民生委員児童委員会 南田辺民生・児童委員会 12月分楽基金 13件 外来ご父兄 港区民生委員・児童委員 大阪市港区社会福祉協議会	あさしお園・ゆうなぎ園

寄付物品

月	寄付者(敬称略)	物品名
10月分	匿名 大阪東葉青年クラブ 熊本県経済農協同組合連合会 大阪市社会福祉協議会(善意銀行) 一般社団法人生命保険協会大阪府協会	医療用品等 お菓子 多数 野菜類 多数 車いす(介助2台) デジタルカメラ・DVDレコーダー各3台
11月分	大阪本場青果卸売協同組合 パイオニア労働組合 フルタ製菓株	みかん(10k) DVD(ドラえもん他4本) 菓子 多数
12月分	2015大阪公演「AMAZING MOMOTARO」 大阪戎橋いとはんライオンクラブ 大阪レッグニット卸商協同組合 一般社団法人生命保険協会大阪府協会 イケアジャパン株 大阪東葉青年クラブ 熊本県経済農協同組合連合会 大阪本場青果卸売協同組合	サムライ・ロック・オーケストラ ピアノ(運送費含む) くつ下 多数 ヤマハポーター ソフトイ(ぬいぐるみ) 多数 お菓子 多数 野菜類 多数 みかん(10k)
あさしお園・ゆうなぎ園		



大阪発達総合療育センター

URL : <http://osaka-drc.jp>

南大阪小児リハビリテーション病院(保険医療機関)
フェニックス(医療型障がい児入所施設・療養介護事業・短期入所事業)
主として重症心身障がい児者
わかば(医療型障がい児入所施設・短期入所事業)主として肢体不自由児
ふたば(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業)主として肢体不自由児
いぶき(特定相談支援事業・障がい児相談支援事業)
なでしこ(生活介護事業・児童発達支援事業)

〒546-0035 東住吉区山坂5-11-21
TEL:06-6699-8731 FAX:06-6699-8134

発行者・社会福祉法人 愛徳福祉会
発行責任者・梶浦一郎

訪問看護ステーション めぐみ(指定訪問看護事業)
TEL:06-6699-8855 FAX:06-6699-8856
ヘルパーステーション めぐみ(指定訪問介護事業)
TEL:06-7506-9223 FAX:06-6699-8856
あおば(児童発達支援事業)重症心身障がい児
TEL&FAX:06-7507-1277
〒546-0035 東住吉区山坂5-9-16

大阪発達総合療育センター あさしお診療所(保険医療機関)
あさしお園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として肢体不自由児
ゆうなぎ園(児童発達支援センター・保育所等訪問支援事業・障がい児相談支援事業)主として難聴児
〒552-0004 港区夕照2-5-3
TEL:06-6574-2521 FAX:06-6574-2524